

天草灘

林
芙
美
子

白いペンキ塗りの壁は、雨のせいかな霧を噴いてゐた。狭い二等船室には、それでも床の間があり、違ひ棚には、花模様の花瓶に、牡丹色のつゝじが活けてあつた。青いビロードを敷きつめた部屋だったが、小奇麗で、坊主枕が五ツ六ツ散らかしてある。白菊丸と云ふ名前で、五十二トンだと聞いたが、如何にも、天草通ひらしい小さい船だつた。

雨で、海上は灰色に煙つてゐた。案外おだやかな航海だつた。船が動き出して、茂木の港を離れると、船員が茶を運んできた。塩気のある美味い緑茶だつた。黒つぼい緑色のジャケツを着た、中年の女が二等船室に這入つてきた。狭いデツキで、この女は、さつきから、船員と一緒にゐた。太い縄をたぐつたりしてゐたので、船員の細君でもあらうかと見てゐた。デツキでは此の女は、黄いろい雨合羽を着てゐた。雨に濡れながら、縄を船員と一緒にたぐり寄せてゐた。

二等船室に這入つて来ると、彼女は部屋の隅に陣取つて、「富岡へいらつしやいますか」と私に聞いた。私は、船の動揺が気持ちが悪かつたので寝転んでゐた。寝転んで、長崎の本屋で買った「草枕」を読んでいた。

私は、長崎の福島屋と云ふ旅館で五泊ほどしたが、こゝで二日目の夜、盗難にあつた。枕もとのスタンドをつけて寝てゐたのだが、疲れてうとうととしてゐた。瞼に射してゐた燈火がすつと暗くなつたので、何となく薄目を開けた。眼のさきには、女の後姿がぼつと見えた。夢うつゝのなかで、卓上の時計や、机の下のハンドバックが気にかゝつたが、それは一瞬の旅人らしい不安さで、そのまゝ寝返りを打って、私はこんこんと眠ってしまった。

いつもの癖で、夜明頃に眼を覚ました。何時頃であらうかと、机へ手をのばして、時計を探したがなかつた。廊下の硝子戸はまだ真

暗である。時計は洋服のポケットへでもしまつたのかと、寢床から手をのばしてハンドバッグを探してみたが、ハンドバッグもない。ハンドバッグと時計を失つた以外には、四圍は何の変化もないのた。床の間や、洋服のかゝつた押入れを探してみたが見当たらなかつた。嫌な気持ちが出た。随分旅もしたが、初めての盗難であつたので、掻き消えていつたやうな紛失ぶりが、私には不思議でたまらなかつた。

船の中で「草枕」を読みながら、まだ、私はその盗難事件にこたはつてゐた。長崎の新聞社で金を借りては来たものゝ失つたものに就いての執着が、時々、夢うつゝで見た女の後姿に、どうしてもむすびついて来る。あれは錯覚だつたのだらうか、それとも、男の盗人がそつと這入つて来たのだらうか。何としても私にはなつとくがゆかない。

隣室の客も、時計を机の上に置いておいたのださうだが、これは盗まれなかつた。隣室の客は、枕もとの鞆を盗まれただけだつたが、これは、私の隣の空室に、私のハンドバッグと一緒に捨てゝあつた。何も盗られてはゐなかつたと見えて、巡査の来る前にその客は鞆を持つて朝早い汽車で東京へ発つて行つた。

空部屋の片隅に、私のハンドバッグの中味の名刺が、散乱し、結局、私のものだけが失はれてゐた。推理を進めてゆくうちに、「草枕」の活字は少しも眼にははいらなくなつた。

「富岡へ着くには、どの位かゝりますか？」
「一時間半位のもんです。此分では先へ行つて、少しは海上が荒れるかも知れません」

女は雨に濡れた赤つばい髪をなでつけながら、横座りになつてゐた。外地から引上げてきた女のやうに見えた。平べつたい、色の蒼黒い顔だつた。

「天草ですか？」

私は起きあがつて彼女に尋づねた。

「えゝ、天草の本渡のものです。長らく青島にをりまして、子供二人かゝへてあなた、引揚げて来ましたのですよ」

「大変でしたね・・・」

「えゝ、もう、とても子供づれで、あなた、無一物になつて戻りましたから遊んではをられません」

「何をなすつていらつしやるんです？」

「いまですか、いまは、玉子の仲買ひをしております。毎日のやうに、この船で茂木まで売りに行つてをりますと・・・」

玉子の商売が、どの位の利益になるものか、私に判らなかつたが、深くせんさくして尋づねる事はしなかつた。私は、暫く、呆んやりと窓を見てゐた。鉛色の水平線が、窓の外で高くなつたり、低くなつたりしてゐる。「天草はおはじめてですか？」彼女がきいた。

「いゝえ、もう十一二年昔でしたが、一度来たことがあります。富岡の松本さんと云う雲丹屋さんで、美味い雲丹を買つたことがあります」

「松本さんは、先代の人は亡くなられた様子です、—いまは塩が悪いので、昔のやうに美味い雲丹は出来なくなりました。今夜は富岡でお泊りですか？」

「着いた模様ですが、富岡には、どんな宿屋がありますか？」

「さうですね、三文字屋さんと云ふのがありますが、こゝがいいかも知れません」

島影一つない、茫洋とした灰色の天草灘を、小さい船は、激しいエンジン音をさせて走つてゐる。

「天草においでになつても、ほんとに見るところありませんですもんね。天草らしいと云へば、富岡ぐらゐのもんでせうか。静かな

のんびりしたところです・・・女のひと、昔はからゆきさん云ふて有名でしたけど、いまは、美しい人もありません。何しろ、昔は海外へ働きに出とつたものばかりで、いまはそれがみんな敗戦のおかげで苦勞しに戻つて来てをりますもんね。―島も引揚者でいつぱいでもンね」

私は、煙草やサンドウイツチを彼女にすゝめた。話をしてゐるうちに、少しづつ船の動揺も氣にならなくなつて来た。雨のせいとか、肌がじとじとして氣持ちが悪く、東京を發つて十日あまりになるせいか、何も彼ものろく、進むのも退くのも、いまはどうでもよくなつて来てゐる。朝霞八重山越えてよぶ千鳥、呼びや汝が来る屋戸もあらなくに、海を見てゐると、そんな、誰の歌かも判らない歌が思ひ出される。白い鳥が群れて飛んでゐるやうに、広い海上の到るところに、波頭が立つてゐた。時計を盗まれたので時間が判らなかつたが、一時間位は進んだやうな氣がした。三時半には船が着くのだ。この航路では、めつたに二等に乗るものもないとみえて、客は私達以外にはない。

「私も、主人と一緒におりましたら、いま少しは、楽なのかも判りませんが、何しろ、私は我がまゝなものですから、どもこもなりません・・・」

「御主人は御一緒ぢやないんですか？」

「はい、いま、尾道の方にをります。私も、青島から引揚げて来て、子供と、主人の実家の尾道へ参りましたが、どうにも遠慮で、暮らしにくいものですから、子供を連れて、天草へ戻つて来ました。青島にをります頃は少しは、楽しみのある生活もしておりましたが、引揚げてきましてからね、その日暮らして、毎日のやうに、かうして船に乗つて、茂木へ玉子売りですもんね。このままで、私の一生も終りますけど、私はいゝとしましても、子供だけは教育してや

りませんとね・・・」

「御主人は、何をしたいらつしやいますの？」

「勤人でございます」

「毎日のやうに船に乗っていると、随分、あぶない事もありますでせう？」

「はい。それでも、あなた、めつたにそんな事はありません。一度怖ろしい事もありましたが、船には馴れましたもんね。商売は休むわけにはゆきません。少々のことは押して、船さへ出れば、私は玉子を持つて茂木へ行きます、朝八時で出掛けて、この船で戻つて来ます。母と、子供二人かゝえてをりますものですから、一日も商売を休んぢやゐられません。軀一つが、資本ですもんね。」

富岡には四時一寸前に着いた。小雨が降つてゐた。港とも云へないやうな、小さい波止場に、木造の郵便局風な汽船の發着所があつた。濡れてずるずる滑りさうな、はしけを渡つて、その發着所へ走つて行つたが、船から一緒に降りた女は、親切に、發着所の電話をかりて、旅館へ電話をかけてくれた。あひにくと、外人が家族づれで泊つてゐるさうで、彼女の教へてくれた三文字屋には断られて、私は途方にくれた。本渡へ行くバスがこゝへ来るまでは、まだ一時間間があり、こゝから本渡までは、二時間近くもかゝると聞いては、どうしてもこの富岡へ宿を取るより仕方がない。發着所の前のお休み所と看板の出てゐる処へ、荷物を運び込むと、眼の前を、伊勢海老を箒いっばいかゝえて走つていく、漁師風な男に逢つた。海老はびくびくと箒の中で動いてゐた。

三文字屋旅館と同じ古い旅館で、もう一軒岡野屋旅館と云ふのがあると云ふので、船の女は、私のところに走つて来て、そこはどう

だらうかと聞いた。いまでは何処でもいゝのだ。私は、そこへ電話して貰つた。三十分ばかりも、休み所に待たされたが、岡野屋旅館の話では、女中が歯痛の為に寝込んでゐるので、思ふやうにお世話も出来ないと言ふ話であつた。女中なしで満足な事も出来ないが、それでもよければ、泊めてくれると言ふので、私は、女のひとに、ぜひにもその宿に泊めて貰へるやうに電話を頼んだ。

纏て雨の中を、番傘をかゝへた若い男と、おさげの娘が迎へに来てくれた。船の彼女に別れを告げると、休み所の店先に並べてあつた雲丹の瓶を取つて、彼女はあわてゝ私に持つて行くと云つた。私は、かうした世話になつた上に、彼女の贈物を受けるわけにはゆかなかつたので、強く断つたが、宿へ着いてみると、おさげの娘が、雲丹の瓶を持たされて来てゐた。玉子を売つて暮らしてゐる女に、雲丹を贈物にされる事は、何とも忍びなかつた。

波止場から狭い道を左に折れて、私は若い男の差しかけてくれる傘にはいつて歩いた。

「旅館は遠いの？」

「はい、六百米ばかりあります」

六百米と云はれて、私は、どの位の遠さがあるか判らなかつた。

「六百米つて、一キロ位なの？」

「そんなにありません。」

「貴方は岡野屋さんの息子さん？」

「はい」

「岡野屋さんは古い宿屋さんなの？」

「明治初年からやつてをります」

やつと岡野屋旅館へたどり着いたが、風雨に晒された素朴な玄關であつた。岡野屋の息子は、差してゐた番傘を、玄關の前の八ツ手の植込みのところへ、開いたまゝぱあんと投げた。雨で重たくなつ

た番傘は、八ツ手の植込みのなかへコマのやうに舞つて行つた。天井の低い二部屋つゞきの間に通されたが、白いかつぼう着をきた品のいゝ主婦が、手を宙に泳がせるやうなかつこうで、挨拶に二階へ上がつて来た。髪は少し白かつたが、若い時は仲々の美人であつたらうと思へるおもぎしである。

「女中が歯を悪くして寝てをりまして、あひにくの時でございますね。何とも申しわけございませんです。―私は眼が見えませんが、お客様のお顔が見えませんが、残念でございます」

障子を明けて、干潟になつた海を見てゐた私は、吃驚して主婦を振り返つた。

「私も若い時は、東京にをりましたのですよ。主人も早稲田へ行つてをりまして、学生の軍事教練に反対したりして、ストライキなどしましてねえ、学校を追はれたりしましたとです。何しろ、主人はあまのじやくうですから、此宿屋も貧乏しとりますとです。…」

主婦は問はず語りに、敷居ぎはへ座り込んで話してゐる。よつほど人なつこいのもあらうかと思つた。海は、畑のやうに縞をなして干潟になつてゐた。鳥が群れて、黒い砂地を何かついでばんでゐた。

「あら、どうして眼が見えないんですか？」

「はい、女の子を生みます時、その子供が、あなた、十二月もおなかにをつたものですから、ひどい難産をしましてねえ、それから自然に眼がかすんでまゐりました。子供は十二月も、私のおなかにをりましたものですから、あなた、生まれた時には、前歯が一本ございまして、それはそれは吃驚いたしましたとです。その歯は、さはつてみますと柔らかいものでしたが、きまりが悪くて、なるべく笑はせないやうにしてをりましたとです。…」

主婦はおもながな、色の白い、顔を挙げて、激しくまばたきしながら、私の方へ顔を向けてゐた。私はしめつた靴下をぬぎながら、

火鉢の前へ座つた。赤茶けた畳、黄ろくなつた襖、壁ぎには、細長い置床があり、背の高い柱鏡が立てかけてあつた。

「お風呂はございますか？」

「それが、あなた、この雨で、薪が濡れまして、折角のお客様に、お風呂も焚いて差し上げられないのでございます」

雨は小降りになり、激しい風が吹きつけて来た。狭い廊下へ出てみると、石崖の下の砂地を鳥が一羽、しきりに水たまりのなかをあさつてゐた。茫洋としてゐた海上には、白い波が浮き立つてゐた。

「今夜は鯛を差し上げるつもりで、息子を走らせましたが、鯛が何処にもございませぬのです。あひにくの事でございませぬ」

「さつき船着場で、海老を見たんですけど、海老はたべられませんか・・・」

「はい、海老なら、何とかありますでせう・・・」

主婦はやつと立ち上がつて、足さぐりに暗い階段を降りて行つた。廊下の欄干には、雨戸をおさへる、太い丸鑲が打ちこんであつた。

低い軒の、渡しの木にも、太い丸鑲が打ちこんであつて、風の激しい日の雨戸おさへに使ふものらしい。風はしきりに硝子戸をゆすぶつた。静かな海のやうに見えてはゐるけれども、海上からは叩きつけるやうな、荒いなまぐさい風が吹きつけた。

「はい、海老ならばいゝのがはいりますさうです。お客様は、お酒はいかゞですか・・・」

主婦はまたゆつくり、手探りで茶を運んできた。

「お酒は二本ほどつけて下さい。——ここから熊本みずみの三角みすみに行くには、船は何処から乗つた方がいゝのですか？」

「本渡からでもようございませぬし、大浦からでもようございませぬ。本渡からですと、二時間ばかりですし、大浦からですと、四十分かかりで行けませう。——あとで主人に聞いて参ります。主人も、今夜、ぜひとも、話にあがりたいたと云つてをります。只今、海老を

料理してをりますものですから、ご挨拶にもあがれませぬけれども・・・」
私は立つて電燈をつけた。ランプの笠のやうな、波を打つた笠ぶちが、薄青い色をしてゐる古風な田舎びた電燈で、ひどく暗い。

懸て、主婦と、さつき船着場に迎へに来てくれた女の子とで、膳を運んで来たが、膳の上は、刺身も、碗も、煮物も、何も彼も海老づくめの心づくしであつた。茶色の硝子の徳利が二本、膳の上に並んでゐた。

「あなたは、お若い時、大変美人だつたでせうね」

私はつくづく、主婦の、品のいゝ、淋しさうな顔を眺めて云つた。

「いいえ、私は、もう長い事、自分の顔を見た事がございませぬ。自分が、どんな顔をしてをりますのか、十何年も鏡を見たことがございませぬものね・・・。時々、主人に襟あしを刺つて貰ひます時に、どんなに變つたかと聞くだけでございませぬ。いまは、二人の子供を教育します事だけでいつぱいでございませぬ。——昔はこれも、あなた、女中も二三人はをりましたが、いまは、かうして、ぼつぼつやつてゐるだけでして、今夜も、水産試験所のお方が十人ばかり来ると云ふお話もありましたが、何も料理が出来ませぬのでお断りしました。人手もありませんし、女中も寝込んでをりますものですから、本当に申しわけございませぬ」

疲れてゐるせいか、酒も美味くはなく、船の女の人に貰つた雲丹で茶づけをして、ふつと、海をのぞくと、黄昏の海は、いつの間にか崖下にまで、波が押しよせてゐて、さつきまでの遠い干潟は、あとかたもなく海水の底に消えてゐた。黄ろく濁つた海であつた。

(昭和二十五年五月二十三日 別冊文藝春秋 第十六号より)